

心理経済学では「こころ」と「経済」ものは連動しているときれ、「こころ」抜きに「もの」を語ることも、「もの」抜きに「こころ」を語ることではできないと考えている。それは現代の経済が「もの」の兌換可能性から離れ、心理的な「信用」と「同意」だけで動くからである。

そこで本書では、この「こころ」と「もの」の関係とはどのようなものか、また、神経症の人々の姿を心理経済学の立場から見るとどのように解釈できるのかといったことをわかりやすく解説している。そして、将来の日本については、官僚の汚職やルールのない規制緩和による社会経済状況の悪化によって生まれた国民の不信感や被害者意識が、経済状況を悪化させている要因の一つであることを自覚し、今後には明確な「こころ」の戦略、つまり「こころ」を計算して「もの」について考え、「もの」について計算しながら「こころ」について考えることが必要だと説く。(B6判・200頁・20000円・産業図書)

生きていくだけで満点

◎ 夏目詳子著

この本は、不登校やいじめなどで悩んでいる中学生や高校生を支え、励ますために書かれた詩を収めたもので、書名は冒頭に収められた詩の最初の一行。

自分で限界を決めないで、あなたは無限の能力をもっているのだから、と呼びかける「限界」、あなたはあなた自身の味方になってあげなければ、と訴える「味方」のように、そのど



れもが、はつきりと、しかも面と向かって子どもたちを励ますものばかりであるが、直接子どもに語りかけている点はかえって新鮮である。そして後半には、子どもの思いを聞き、叱るときは一对一で、人間はずべてが大事だということ伝えてください、という教育学部に通う姪のための詩が収められている。(B6判・150頁・1600円・ポカラ出版・星雲社発売)

講座・生命

2000 vol. 4

◎ 中村雄二郎・木村敏監督
野家啓一・佐々木正人他著

年報というユニークな形式で創刊されている『講座・生命』の4巻目となる本書の今回の特集テーマは「共通感覚」である。

この「共通感覚」とは、視覚・聴覚・嗅覚・触覚といった諸感覚に通底するもので、冒頭、哲学と精神医学という違った分野で仕事をしてきた監修者2人が、自らのLSD体験などを織り交ぜながらその原理について語り、続いて気鋭の論者らが「共通感覚」に早くから着目していたギブソンの著作『知覚システム』を素材に、それぞれ感覚間に境界を置かない「共通感覚」という概念を語り、メルロ・ポンティにおける共通感覚である「キアスム」という概念を論じている。他にテーマとは関係ないが、ヴァイツゼッカーの「医学的人間論を踏まえて生と死の人間学を展開する」「パトスの現存」や、音楽癡痴という病像を材料にして癲癇患者の神秘体験について語る「痙攣するイデア」といった寄稿も知的刺激に満ちている。(A5判・298頁・3600円・河合出版)

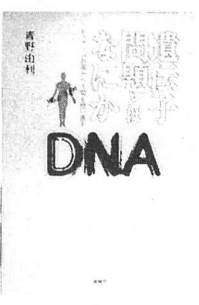
遺伝子問題とはなにか

ヒトゲノム計画から人間を問ひ直す

◎ 青野由利著

人間の設計図である遺伝子の塩基配列を解読するヒトゲノム計画がすすみ、これを利用した「遺伝子診断」や「遺伝子治療」は、ここ数年で急速にすすんできた。だが、果たしてこの遺伝子解読＝ヒトゲノム計画とは人間にとって福音となるのか。

一読することで、恐らく遺伝子が何もので、人間の心や体質、将来かかるであろう病気が



遺伝子によってある程度、運命づけられていることなどがわかる。だが、その一方で、遺伝子と発病の関係がかなりはつきりしているものもあれば、必ずしも対応しないものも多々あり、このような遺伝子探しが新たなジレンマを生み、最後には人生の意味の変更を余儀なくされる時が来るだろうと著者は予測する。(B6判・275頁・2200円・新曜社)

中世の象徴と文学

◎ ジャック・リパール著
原野昇訳

中世フランス文学に顕現する「象徴の森」とは何か? 著者はキリスト教という視点を軸に複雑多岐にわたる象徴の森を体系的に解明しようとする。

ここでは、12世紀に書かれたものを中心としたアーサー王文学や、『トリスタン物語』、『クレチャン・ド・トロワ』の作品などを取り上げ、象徴のテーマを、数、色、動植物、名前、場所、時間、事物の7ジャンルに分けて考察する。例えば「場所」の象徴でいえば、森、荒地、果樹園、囲まれた空間としての塔、部屋、壁、窓、城と島、川と海、引き返し不可能な場所と異界、といった読解の指針となるキーワードを提示する。こうした中から見えてくるものは、へそこには人間と世界についてのキリスト教的見方が、半ば形而上学的一般図式として、少なくとも背後には、歴然と存在するという認識だ。その象徴ばまた、文学に限らずあらゆる芸術分野に通底するもので、中世を解く鍵である。(B6判・236頁・3000円・青山社)